

介護の切りすてアカン！ みんなの大集会



講師：服部万里子さん(日本ケアマネジメント学会副理事長)

5月12日(金)午後6時半 北区民ホールに来てね！

■生活とリハビリ研究所
三好春樹さんから

安倍総理大臣は本日、記者会見を開き、これまでの『命より金』『国民より国家』という極悪非道の政策を悔い改めることを発表した。これにより、介護と育児に大幅な予算を集中するという。

これは、エイプリルフールでの私のフェイスブックへの投稿です。

今の政権下で、介護を巡る状況がよくなるとはとても思えません。でも介護は「命より金」という価値観に加担せず、逆に、いい介護をすることが「金より命」という価値観

値観を現場から創り出していける仕事だと思いません。

そんないい介護現場と介護職が生き残れるために、「みんなの大集会」にエールを送ります。

■訪問看護師・作家

宮子あずささんから

精神科病院の訪問看護室に勤務しています。症状と家事能力は密接に関連し、家事支援なしに自宅で暮らせない利用者さんがたくさんいます。

現状でも十分な家事支援が受けられているとは言えず、訪問看護でゴミ出し、清掃などの支援を行う場合も少なくありません。

せん。

現状でも不十分な家事支援。これをさらに切り捨てては悲惨な結果を招くでしょう。

訪問看護の立場から、家事支援の重要性を強く訴えたいと思います。

介護サービスの切り捨てに抗するために、皆さん、共にがんばりましょう。

講師の服部万里子さんは4月2日NHKテレビ日曜討論「超高齢社会 どうする私たちの介護」に出演。

ご覧になりましたか？

識者と呼ばれる6人の出席者の中で唯一、正面から介護保険制度の改悪に反対する論陣を張られました。

集会での講演、乞う！御期待。

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！

介護労働者の訴え

昨年十一月月二五日

集会での発言の要約です

現場で働くホームヘルパーとして、政府の言う「介護離職ゼロ」などのきれいごととかけ離れている労働実態を訴えたい。在宅の支援を支えているのは登録のヘルパーさんたち。賃金は、時間請負のような働き方で、訪問して支援した分の賃金をもらう。

う時間をなくされてきた。利用者さんの身体や心の変化の大事な部分を見落とさないか不安。今では「家事援助は誰にでもできる」とボランティアの導入まで…。一般企業の労働者よりも月八万も九万も安い賃金で、利用者さんや家族さんに寄り添いたいと現場を支えてきた介護労働者をこれ以上、侮るな。家事援助を、四五分以上は何時間やっても介護報酬は変わらないという報酬制が導入された時、登録ヘルパーさんたちはどうなったか。家事を一时间やって一、二〇〇円貰ってもらっていたのに、

改悪後は利用者さんの家に早めに行き、同じ家事をこなして賃金は四五分の九〇〇円に。利用者宅まで二〇分自転車をこぐ時間にも賃金保障はない。要介護度も以前より軽く認定されるようになり、使える介護時間が制限され十分な支援が出来ない現状。家事は四五分しかプランに組めない、実際は身体的介護をしているのに介護報酬がより低い生活支援しか位置づけられない等の矛盾だらけ。

介護する者と介護を受けるものが分断されないように問題の本質をしっかり見ていきたいものだ。国は自宅で亡くなりた

いとの気持ちをうまく利用して「川上から川下へ」と在宅を推進しているが在宅で安心して介護を受けられる状態ではない。

先日も末期の肝臓がんの利用者さんが再入院し、すぐに退院してきた。訪問すると幻覚あり、お風呂場に便、トイレの便器に血液など異変が。こんな状況での緊急訪問を登録ヘルパーさんにお願

いするのは気の毒。翌日生きているのかと不安だった。案の定、翌朝、鍵を開けて入ると倒れていた。「死ん



でる」と思ったが少し手が動いたので救急車を呼び病院へ同行。休み返上で三時間つきそったが行政は介護報酬は算定できないという。

病院のベッドで点滴をしながら意識混濁している利用者さんの姿に、容態が悪くても退院させられる、人を大事にしない、生存権すら守られない状況を国がつくっていることを目の当たりにした。

私たち介護福祉士を医療の下請けにして、安上がりな介護をやらせていく方向性、これ以上、国の悪政を私たちや利用者さん家族に押し付けられない！強い憤りで一杯だ。

4月23日(日)は「一億三千万人共謀の日」

みんなで共謀!

私たちの人間関係は
相談・合意=共謀で成り立っています



少人数で
駅頭スタンディング
やってみる?

NO 共謀罪

朝日新聞
「声100年」らぼり

純白な心に掬 自由奪う恐怖

主婦 水野 美那子
(大阪府 83)

2日の「共謀罪」提案 心まで脅かす」「危険で悲しい教育勸語暗唱」を読み、戦中が思い出され怖気をもった。

寒い校庭で、天皇陛下の御影の前で暗唱させられ、「これが何になるんだろう」と子供ながらに思った。神武天皇から代々の天皇も暗唱させられ、寒さで倒れた女子もあった。

里の祖母は面倒見の良い人で誰の相談にも気軽に乗っていたので、いろんな職業の人が訪ねて来た。中に「フーテンの寅さん」のように全国を回る人がおり、年に4、5日旅の途中に立ち寄り各地の情報を伝えた。投桶の通り「戦争に負けるかも」と話しただけで特高警察に捕まり、ひどい目に遭った人が数知れないと話していたそうだ。

あのころ、民衆が立ち上がったいたら戦争には参らなかつたのではないか。昔歩いた道に今の子を近寄らせるわけにはいかぬ。教育勸語が良いか悪いかよりも、暗唱することによって純白な心に掬として刷り込まれるのが怖いのだ。お二方の投桶で日々私の中で芽生えていた観念がはつきり見えた。再び日本を戦争に導いてはならぬ。意見を自由に言える日本でありたい。